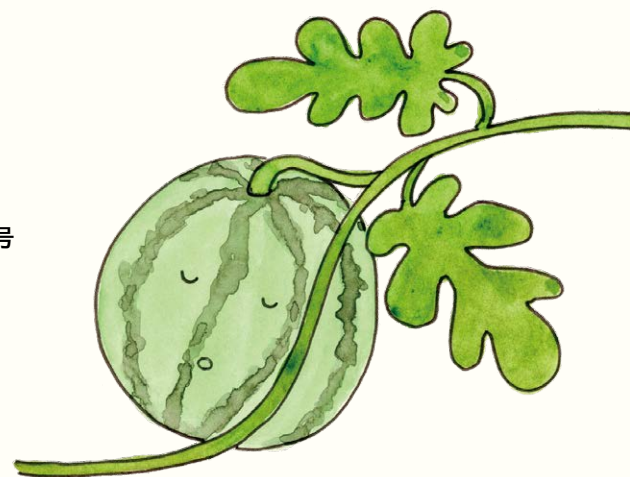


とことば

2026

2号

tokotoba



特集

多様性と言葉——さまざまなルーツ

[寄稿]

金井真紀 森山卓郎 Rita KOHL

[事例紹介]

神奈川県横浜市立南吉田小学校

日本語初期指導教室カラフル(愛知県西尾市)

社会福祉法人さぼうと21 目黒教室(東京都品川区)



連載

天気と言葉とわたしたち②

長谷部 愛

日本語と英語の行間で考える②

キニマンス塚本ニキ

わたしをつくった言葉①

小津夜景(俳人)



光村図書

教授用資料

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

多様性と言葉

特集

——さまざまなルーツ



私たちの社会では、母語や文化が異なる多様なルーツをもつ人々がともに暮らしています。母語や文化が異なれば、同じ言葉から受け取るイメージや発想が違うこともあるものです。では、日本語を母語としない子どもたちは、異なる言語文化の中でどのように言葉と向き合い、成長しているのでしょうか。そして、学校や周りの大人にはどのような支援ができるのでしょうか。三つのエッセイを入りに、学校や支援団体などへの取材を通して考えます。

東は餅で、西はパイ

金井真紀

文筆家・イラストレーター

雷鳴が聞こえた。西の空に夕立雲がたちこめている。去年の夏の終わり、わたしは西アフリカのマリ出身の友人と一緒に東京都内の路地を歩いていた。

「雨降りそうだねー」

降り出す前に目的地に着けるかな、まあ濡れたら濡れたでいいか。と、わたしたちはぜんぜん歩くスピードを上げないのだった。マリ人は180センチの体を少しかがめるようにして、32センチの大きな靴でリズムカルにアスファルトを踏む。わたしは彼に質問した。

「バンバラ語(マリの言語)で雷はなんて言うの？」

「今は言えない……」

あまりにも予想外の答えだったので、わたしは思わず立ち止まって彼の顔を見上げた。彼は声をひそめて教えてくれた。バンバラ語で雷は「サンペレン」と言う。でも雷が出ているときにその名を口にすると雷が自分のところに落ちるとい迷信がある。

へー、おもしろい！ わたしはこういう話が大好きなので急いでメモ帳を取り出した。彼は続けてさらに興味深いことを言った。

「日本では、ヤモリはいい生き物でしょ」

「うん、ヤモリは家を守るって言うよね」

「マリでは、ヤモリは雷の仲間だと思われている。もし家にヤモリがいたら、雷が落ちるから危ないと言って殺しちゃう」

ゴロゴロと雷鳴が響くとき、昔の日本人は菅原道真公の祟^{たた}りだと考えて「くわばら、くわばら」と呪文を唱えた。なぜか子どもに「おへそを隠しなさい」なん

て言ったりもする。マリとはぜんぜん違うやり方だけど怖がる気持ちは繋がっている。

わたしは世界のことわざを集めるのが好きだ。それもやはり「世界は広くて多様なのに、なんとなく繋がっている」という感慨を味わいたいから。ことわざは翻訳小説や人類学の本にひょっこり登場したり、旅先の看板に見つかったり、海外ルーツの友人とおしゃべりしているときに飛び出したりする。それをすかさず拾い集めてはニヤニヤしている。

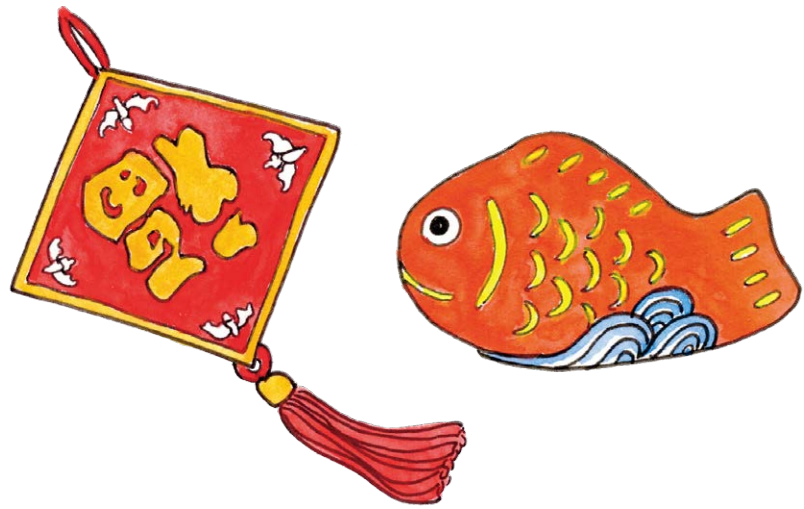
左の絵は4つとも「計画や構想は立派だが、実際には用をなさないこと」を意味することわざ。東で「絵に描いた餅」と言い、西で「空に浮かぶパイ」と言うなんて楽しい。どちらも食いしん坊が言い出したに違いない。空中に城を建てるのと絵の中で乳搾りをするのも、遠い土地の言語なのにどこかで通じるものがある。築城も酪農も重労働だ。想像しているだけじゃダメで、実際に動いてなんぼってことなんだろう。今度マリ人に会ったら、バンバラ語にも似たことわざがあるかどうか聞いてみよう。

金井真紀 KANAI Maki

1974年、千葉県生まれ。文筆家・イラストレーター。著書に『パリのすてきなおじさん』(柏書房)、『テヘランのすてきな女』(晶文社)、『世界はフムフムで満ちている』(ちくま文庫)、『日本に住んでる世界のひと』(大和書房)、『おばあちゃんは猫でテーブルを拭きながら言った 世界ことわざ紀行』(岩波書店)など多数。「多様性をおもしろがる」を任務とする。難民・移民フェス実行委員。

〈参考文献〉『世界ことわざ比較辞典』(日本ことわざ文化学会 編、時田昌瑞 監修、山口政信 監修／岩波書店／2020年)

〈表紙について〉表紙のイラストは、異なる国や言語における同じ意味のことわざを表しています。上から「メロンやスイカは寝ながら育つ」(トルコ)、「果報は寝待て」(日本)、「寝ているうちに網が魚を捕る」(古典ギリシア語)をイメージして描いています。



コウモリ、狸、狐、 そしてトイレと左手？

森山卓郎

早稲田大学教授

今や、公立小・中・高校や特別支援学校に在籍する外国人児童・生徒は14万人近いという。多くの学校で、言語的・文化的背景が違う児童・生徒が学んでいる。国が違えば言葉だけでなく文化的背景——物事のイメージ、価値観や考え方、行動様式など——が違う。

例えば中華料理店などではコウモリの図案を見かけることがある。子どもの頃はドラキュラの中華料理か？などと思ったものだが、そうではない。中国語におけるコウモリ(蝙蝠)の発音(bianfu)が「福に変わる(変福)」という言葉に似ていることからの縁起担ぎだ。蝙蝠は逆さまにぶら下がる(蝙蝠倒)が、この「蝠倒」の発音が「福到(福が来る)」に似るという話もある。ちなみに、中華料理店で赤い紙に「福」を逆さまに貼ってあるのもよく見る。これも一般的には「福倒(福が逆さま)」の発音(fudao)が「福到」と似ることによるとされる。日本でも、お祝いの膳にタイや昆布が出されるが、「めでタイ」「よろコブ」のような発音の類似による縁起担ぎがある。

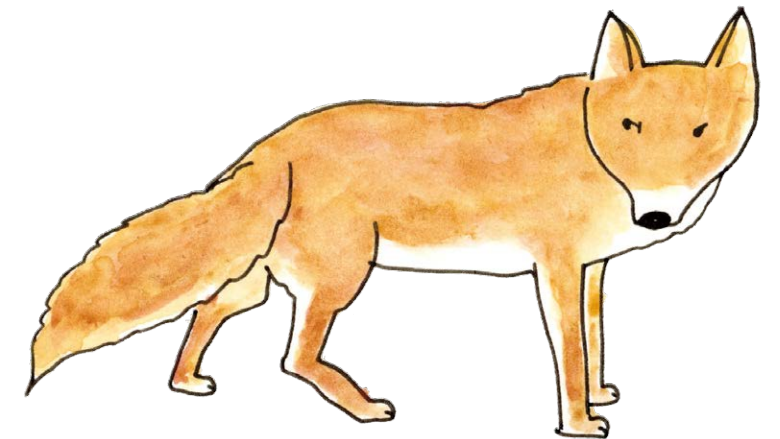
動物の捉え方にも文化による違いがある。サザエさんの4コマ漫画にこんなのがあった。ベンチの横に落ちていた千円札をマスオさんが拾おうとする。しかし、それを子どもたちが止める。実はそれは動物園の狸^{たぬき}のオりの前だった、という話だ。そう、狸や狐は葉っぱをお金にしたりする。人をだますのだ。日本語では「狐と狸の化かし合い」とか「狐につままれたよう」という言い回しもある。あるワークショップでこの漫画を示したことがあって、中国人には意味がわかったがアメリカ人にはわからなかった。『平成狸合戦ぽんぽこ』(スタジオジブリ)という映画があるが、これも狸が化けるという文化的な知識を知らない人にはわかりに

くいはずだ。そもそもアメリカには「狸」そのものはいなくて、アライグマないし犬に近いものとして捉えられる(raccoon dogが一般的な訳)。

狐は欧米にもいるが、ずるいというイメージである。イソップ物語の「狐とぶどう」の狐は、能力が及ばなくて負け惜しみを言う。英語には「狐みたいにずるい(sly as a fox)」という言い方がある。中国では「狐が虎の威を借る(狐假虎威)」という言い回しがある。やはりずる賢いイメージだ。

国語教材では狸も狐も出てくる。「たぬきの糸車」(小学校1年)の狸はいたずらもするが、かわいい。おかみさんとのやり取りもあたたかい。化けないが、糸車を使える。「ごんぎつね」(小学校4年)は、確かに最初はぬすつと狐だったが、独りぼっちになった兵十に栗やまつたけを持って行くようになった。ずるいというのとは違うイメージだ。

特に日本文化での狐のイメージはおもしろい。まず、狐は稲荷神社の神の使いでもある。稲荷ずしは狐が好きな油揚げのおすしだ。日本文学の伝統では、「玉藻の前^{たまも}」という妖怪狐もいるが、「信太の狐^{しのだ}」の話では美女に化けた狐はそのことを知られて、子を置いて去る。「恋しくばたづね来てみよ……」という歌を残すのだが、切ない。狂言の『釣狐^{つりぎつね}』では、一族を釣られた老狐が僧に化けて、獺師に対して殺生をやめるように説く。帰りに罌の誘惑に負けてしまうのだが、これも切ない話だ。日本文化での狐はずるいだけではない。「ごんぎつね」にも、こうした日本文化での「狐」観が影響しているといえれば言い過ぎだろうか。「きつね＝ずる賢い」というだけの「狐」の文化的イメージで「ごんぎつね」を読むとすると、そこには少し距離が



できそうだ。

さて、文化の違いには生活様式もある。例えばトイレ。私が子どもの頃、家も学校も駅も、トイレはほとんどが和式だった。ちなみに私の小学校にはくみ取り式トイレがあって、4時にそのトイレに入っていると「四時婆^{よじばば}」というおばあさんの手が暗闇から伸びてきて下へ引きずり込むという怪談が語られていた。現在でも和式トイレは学校でまだ見られるが、欧米人などには少し使いにくいようだ。

トイレには便器以外の違いもある。中国に行けば落とし紙を水洗で流さず、かごに入れる方式のトイレがある。ドアのないトイレもあった。インドネシアとかタイとかに行ったときには、紙がなくて、水を使って左手できれいにするというトイレがあって驚いたものだ。ちなみに、左手はそういう使い方の手ということになるので、左手で物を示したり渡したりすると失礼になる。そういう文化から来た児童・生徒に対して、親愛の思いだとしても、左手で頭をなでてあげたりするとよくない(右手ならよい)。

言葉の違いはわかりやすい。が、文化の違いはわかりにくい。そのわりに重要だ。国際化する日本。まずは文化の違いについて知ろう・わかってることが大切だ。え？このタイトル、最初わからなかった、って？

森山卓郎 MORIYAMA Takuro

京都府出身。早稲田大学文学学術院教授。専門は、日本語文法論を中心とした日本語学、語用論、言語習熟論。光村図書 小学校および中学校『国語』教科書編集委員。著書に『コミュニケーションの日本語』『日本語の〈書き〉方』『表現を味わうための日本語文法』(以上、岩波書店)、『書くことはなぜ難しいのか』(SB新書)、『明解 日本語学辞典』(三省堂／共編著)など。

言語と言語の間の 数えきれないズレ

Rita KOHL

日葡(日本語・ポルトガル語)翻訳者

私が昔、日本語の学習者であり日本文学の翻訳作品の一読者だった頃に、「日本文学の翻訳で何がいちばん難しいか」ともしきかれたら、漢字の使い方と、ブラジルに存在しないものや概念の翻訳と答えたいだろう。実際、自分で翻訳してみると、そういう点が難しい。例えば、縁側や玄関、こたつのように、日本の日常生活には当たり前にあるけど、ブラジルには存在しないものをポルトガル語の読者に想像させるのには苦労する。

しかし、この仕事を始めてから認識したのは、日本語とポルトガル語の翻訳で直接対応しているように見える言葉でも、日本人とブラジル人がその言葉から連想することが微妙に違う場合が多いということだ。例えば、お米。ブラジルでも白ご飯を意味するarroz brancoが食事の定番だが、この言葉でブラジル人がイメージするのは、細長いお米を玉ねぎやニンニクで炒めたパラパラのご飯である。

要するに、言葉や表現の裏にある、連想されるものの違いを意識することが文学作品を翻訳するうえでとても大事になる。例えば、セミが鳴いている場面は、

日本人の誰もが「夏だ」とわかる。桜が咲く時期なら、学校の新年度が始まるという点も、日本人の間では共通の認識であるが、ブラジルではそうではない。今、私がこのエッセイを書いている1月のブラジルは真夏で、汗をかきながら執筆しているが、日本の小説で出てくる1月は冬だ。このように、地球の真反対に位置する両国間で季節の捉え方が違う。

また、土足で家に上がる行為が失礼だということをブラジル人が知らないように、日常習慣や家の構造に関する問題も多い。村田沙耶香の『コンビニ人間』では、ある人物が風呂場で寝ようになる設定があるが、ブラジルの間取りは基本的にトイレ・洗面所・浴室が一緒になっているので、ブラジル人から見ると、誰かが自分の家の浴槽に入っていたら、トイレを自由に使えなくなってしまう。津島佑子の『光の領分』の主人公は、敷きっぱなしの布団を見られるのを恥ずかしがるが、布団を敷くという概念がないブラジル人読者には、その気持ちが通じるのだろうか。

このような細かいズレについて考え出すと、きりが無い。翻訳者としてその数え切れない細かいズレをどう埋めるべきか。

答えは一つだけではない。私自身、最初は翻訳に関する先入観が強くて、問題ごとに自分の中で一定のルールがなければいけないと思っていたが、経験が重なるにつれて、そのような先入観は崩れていった。翻訳作業で無数の決断を行うときは、一般的なルールに基づくのではなく、その都度、判断し直す必要があると痛感したのだ。全てを文脈、すなわち、それぞれの作品の物語や文体、言葉が出てくる場面などを考慮したうえで決めなければいけない。

本エッセイで言及している問題も例外ではない。具体的な例として、日本ではおなじみの「押し入れ」の翻訳について考えてみよう。仕様は違うが、ブラジルの家にも備え付けのクローゼットがあるので、「押し入れ」がただの「洋服や布団をしまうところ」という意味合いだったら、その翻訳は難題ではない。しかし、誰かが押し入れの中で横になって寝る場面だったら、ブラジル人に対して、押し入れ特有のサイズと構造が重要な情報になる。このように何か情報を補足する必要があると判断した場合、次はそれをどうやって読者

に提供するかという問題が生まれる。脚注で説明したり、形容詞を入れて少しヒントを与えたりするなど、その作品・箇所にとって何がいちばんふさわしいか判断することも、翻訳者一人一人の考えによる。

また、文化の違いによって、翻訳を大々的に見直す必要がある場合もある。最近翻訳した小説で「猫田」という登場人物が、自分のことを「ニャー兄」と呼ぶように自己紹介する場面があった。日本では、かわいらしくて親近感をもたせるあだ名と捉えられるだろう。しかし、ブラジルでは異なる。ポルトガル語で「猫」はgatoだが、ブラジルでは、「イケメン」(女性の場合は「美人」、「いい女」)という意味で誰かのことを「Gato」と呼ぶ。つまり、「ニャー兄」というあだ名を直訳したら、ニュアンスが変わってしまう。そのため、例えば、何か別のかわいい動物名を用いるなど、通常よりもかなり手を加えなければならなくなる。

このように、小説を理解して楽しむために何が大事なのか、ブラジル人読者の既成概念の傾向、また、補足が必要な場合に取り方など、それら全てをどう考えて扱っていくかは、その翻訳者しだいである。しかし、翻訳者がたった一人でそれらに直面して決断していくわけではない。例えば、私は日本文化・日本語に関わって25年たつので、日本についてほとんど知らない読者の視点に立つのは難しい。そこで編集者などの意見がとても大事になってくるのだ。

読者ができるだけ深く作品を味わえるよう必要な補足を入れることはもちろん大切だが、それに加え、私が翻訳するときに気にしていることがある。それは、補足しすぎて脚注などの説明が頻繁に出てくると、日本文化がわかりにくいもの、または日本人がミステリアスな「他者」という印象をブラジル人読者に与えてしまう危険性があるということ。それを常に念頭に置いて翻訳している。

Rita KOHL ヒタ・コール

1984年、ブラジル・サンパウロ生まれ。現在、日葡翻訳者として活動中。サンパウロ大学卒業、東京大学大学院修士課程修了(比較文学・比較文化)。村田沙耶香、小川洋子、村上春樹、有川浩、津島佑子らの作品など多数の日本文学作品をポルトガル語に翻訳。村上春樹の作品『風の歌を聴け・1973年のピンボール』(Alfaguara, 2016年)の翻訳で2017年のJabuti賞翻訳部門を受賞。

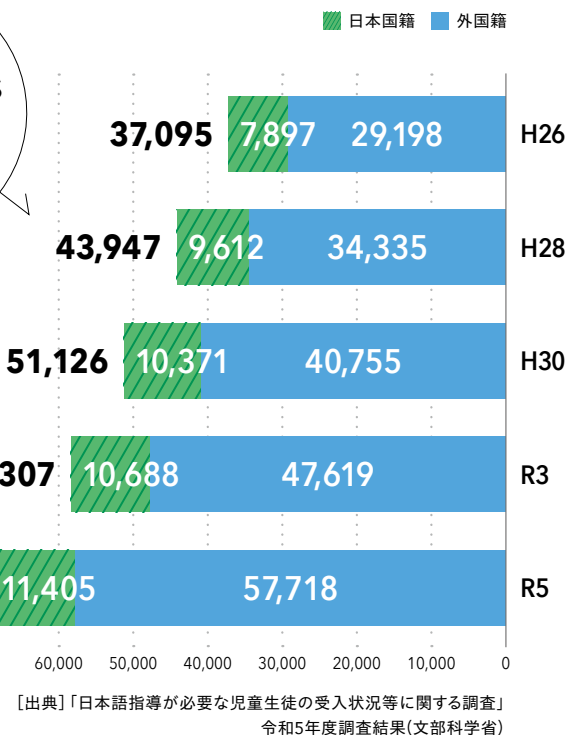


事例紹介

多様な ルーツをもつ 子どもたちの学び

日本語指導を必要とする子どもたちは、
年々増加する傾向にあります。
多様なルーツをもつ子どもたちが
共に学び、生活していくためには、
どのような支援が必要なのでしょう。
小学校、自治体、支援団体の
取り組みを取材しました。

69,123
(人)



公立学校における
日本語指導が
必要な
児童生徒数の推移

事例

01 枠にとらわれない学びの場づくり ——一人一人違うのが当たり前

神奈川県横浜市立南吉田小学校

外国籍または外国にルーツをもつ子どもが約6割在籍する南吉田小学校。
教員、保護者、地域が一体となり、多様な背景の子どもたちを支えています。

地域社会に開いて学ぶ

「さまざまな背景をもつ子どもたちが、共に安心して暮らせる学校を目指していきたい」と話す金子正人校長先生。同校には、全校児童577人のうち、350人も外国につながる子どもたちが通っている。多文化であることを生かした活動が盛んだ。多言語で読書会や運動会のアナウンスを行う他、近年力を入れているのが、地域と連携した取り組みである。昨年の夏休み明けには、自転車の通行ルールを守らない市民に悩む商店街から依頼を受けて、4年生の子どもたちが、地域の住民に向けてルールを周知する方法を考えた。そして、

外国語を母語とする人たちにもわかるように、中国語やウルドゥー語などの多言語でアナウンスを行い、ポスターやCM制作に取り組んだ。



総合的な学習の時間の一環として、横浜橋通商店街のルールを多言語で伝えるCM撮影に取り組む4年生。

消防署の出前防災教室や、ケアプラザで働く専門員を招いた認知症サポーター講座など、公共施設と連携した取り組みは、子どもたちに地域の課題を共有する機会となる。金子校長は、このように、地域課題の解決に向けて共に動いていく過程で、全ての子どもたちに、自分たちにも役に立てることがあるという実感をもってほしいという。

語彙を増やして自信をつける

同校には2種類の国際教室がある。日本語の初期指導クラスと、学年ごとの国語の学習指導を行うクラスだ。国語の授業では、学年が上がるにつれて抽象的・概念的な言葉が増え、



5年生の国際教室の授業のワークシートと「言葉のたから箱」。登場人物の性格を表現する語彙を丁寧に学ぶ。

日本語を母語としない子どもたちにとってハードルが高くなる。そのため、教材の概要をつかみやすくし、学習のための語彙を補う。在籍学級と完全に分離しているわけではなく、導入やまとめの交流会は全員で行うなど、関わりながら進めることを大切にしている。

5年生の国際教室をのぞくと、国語教材「やなせたかし——アンパンマンの勇気」を学んでいるところだった。子どもたちの手元には、ワークシートとともに、教科書の巻末付録「言葉のたから箱」の「人物を表す言葉」のプリントが置かれている。登場人物の心情を表すのに適切な言葉を探し、絵などのイメージの助けも借りながら意味を覚える。「『顔を食べさせるなんて、ざんこくだ』。ざんこくってどういう意味?」「かわいそう」。先生の問いかけに対して子どもが即座に答える姿が印象的だった。「子どもたちは、大丈夫!と言われると自信がつきます。間違えても大丈夫。絶対に否定せず、頭を使ってもらうことで、どんどんしゃべるようになります」(5年生の国際教室担当の伊藤由美子先生)。

多様性を受け入れ、楽しむ

国際教室の指導にあたる先生は、計7名。外国ルーツの子どもたちが増えていく中で懸念される課題の一つに、教える人・支援する人の不足がある。しかし同校では、母語支援ボランティア、地域協働本部などの保護者ボランティア、地域の学生ボランティアなど、さまざまな仕組みを活用して、少人数ごとの支援体制が整えられている。

「日本語教育の専門性をもった人材の育成は大切ですが、それと同じ

くらい大切なのが、多様性を受け入れる姿勢です。本校では、枠の中に収まりきらないことばかり起きます。そういうことを受け入れる土壌があって、一緒に楽しんでいける教員が、現場の求めている人材です」。(金子校長)

同校の子どもたちは、一人で考えるときや、同じルーツの子どうしで話し合うときには母語を使うこともあるが、みんなに意見を共有するときは日本語を使う。日本に来たばかりの子どもと先生の間を他の子どもが通訳したり、子どもたちどうしでサポートし合う姿も日常的に見られるという。5・6年生になると、子どもたちは児童会で「よりよい学校にするためにはどうすればよいか」を自分たちで考え、多様なルーツの子どもたちが多くからこそできること、やりたいことに、主体的に取り組んで実現していく。

「みんなが一緒じゃなきゃいけないという考え方ではなくて、一人一人個性があって当たり前で、それでもお互いに受け入れながら生活していける、そんな共生社会を実現できたらと思います」と、金子校長は将来を見据える。



児童会の様子。めあては「どうすればおたがいを思い合って笑顔あふれる南吉田にできるか考えよう。ほかの人の意見を聞いて自分にできることを見つけよう。」

02 「一人じゃないよ」 ——子どもを孤立させない支援

日本語初期指導教室カラフル(愛知県西尾市)

愛知県西尾市で推進されている多文化共生のまちづくり。
市が設置した「日本語初期指導教室カラフル」は、来日したばかりの
子どもたちを受け止める場として大きな役割を果たしています。

自分らしさを出せる場所に

カラフルは、海外から編入してきた小・中学生を対象に、約3か月にわたって、日本の学校生活に必要な基本的生活習慣や日本語指導、教科学習の導入などを行うプレクラスで、市内の二つの小学校に設置されている。週5日のうち4日はカラフルで学び、1日は在籍校へ登校する。在籍校で安心して過ごせるように橋渡しをするのがカラフルの役目だ。登校したら上履きに履き替える、ロッカーにかばんを入れる、チャイムが鳴ったら教室に戻る、持ち物に記名する——こうした習慣一つ一つが、来日間もない子にとっては初めての体験となる。

そんな中、カラフルが最初に大切にするのは、「ここでは、まず自分を出していい」という居場所づくりだ。室長の菊池寛子先生は保護者と丁寧に面談し、子どもの育ちの経緯や得意なことを聞き出す。楽器が好き、計算が得意など、「その子らしさ」を在籍校にも積極的に伝えることで、周囲の理解を促し、子どもが自信をもって学校生活を送れるようにしたいと菊池先生は話す。

母語による支援で孤立を防ぐ

日本語がほとんどわからない子の孤立を防ぐために、母語での支援も

充実させている。2009年の開設当初(※)、日本語教育を支援する専任スタッフは1名だったが、15年を経て20名に増え、現在は、ポルトガル語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、インドネシア語、中国語、英語の7言語に対応している。支援員は、カラフルでの指導に加え、市内の学校を巡回して子どもたちの様子を見守り、学習支援なども行っている。支援員の中にはカラフル修了生もあり、子どもの気持ちに寄り添うきめ細かな支援は何より心強い。

積極的な情報発信

カラフルではSNSを積極的に活用し、子どもたちの学習の様子をショート動画などで発信している。ふだんからSNSで情報収集をする保護者が多く、子どもたちの日々の様子を伝える手段として有効だという。また、これから来日するかもしれない海外の子どもたちや、来日したばかりの子どもたちに向けて、カラフルの活動を知ってもらいたい。また、これから来日するかもしれない海外の子どもたちや、来日したばかりの子どもたちに向けて、カラフルの活動を知ってもらいたい。また、これから来日するかもしれない海外の子どもたちや、来日したばかりの子どもたちに向けて、カラフルの活動を知ってもらいたい。

カラフルの15年間の取り組みは、あらかじめマニュアル化されていたものではなく、目の前の子ども一人



楽器が得意な中学生が
小1の児童にギターを教える様子。
教室の中には、年齢やルーツが違っても
みんな仲間という空気がある。



「大きなかぶ」の学習の様子をSNSに
アップするために動画を撮影しているところ。
日本語教育指導支援員(手前)は、
カラフル修了生。



多言語用語集「がっこうのことは」
日本語教育指導支援員が中心となり、
学校でよく使われる言葉を抽出した用語集
(7か国語に対応)。

一人を見ながら考え出してきたものだ。「孤立する子どもをつくらない」「誰もが自分らしく過ごせるように」といった思いが、その背景にある。多様なルーツをもつ子どもたちが増える中、カラフルのこれからの歩みにますます注目したい。

03 学校でも家でもない、 三つ目の居場所

社会福祉法人さぼうと21 目黒教室(東京都品川区)

長年にわたり、難民などの外国出身者の自立支援を行ってきた
「さぼうと21」。支援事業の一環として行われている学習支援の取り組みは、
子どもたち一人一人の夢を実現する手助けにもなっています。

雑然とした場所で生まれる コミュニケーション

毎週土曜日に開かれる学習支援室は、2時間ずつの入れ替え制。一度に10人ほどの子どもたちが集まる。1対1の個人指導が基本だ。理科、算数、英語などの宿題に取り組む子。作文の内容を考える子。わからない言葉を教えてもらいながら、好きな本を読む子。ここでは教科にこだわらず、やりたいことを自由に学べる。「きちんとした場所よりも、雑然とした場所でありたい。かしこまりすぎないほうが、自由なコミュニケーションが生まれやすいんです」(チーフコーディネーター・矢崎理恵さん)。

支援室に通い始めて半年ほどになる、小学校5年生の二人に話を聞いた。二人とも両親がミャンマー出身で、生まれは日本だという。「イベントで手縫いのトートバッグを作ったのが楽しかった」と、ここでの感想を話してくれた。支援室では、ワークショップやイベントを開催することも多い。ぶどうを食べ比べて感想を共有したり、川柳を作ってその句に込めた思いを作文にするなど、言葉で表現する機会を豊富に設けている。「言葉の力があると、自分の考えを説明できるようになる。自分の考えを言葉にすると、他の人の考えも知りたくなって、意味のある言語



教室の様子。それぞれの学習に
集中しながらも、にぎやかな雰囲気。

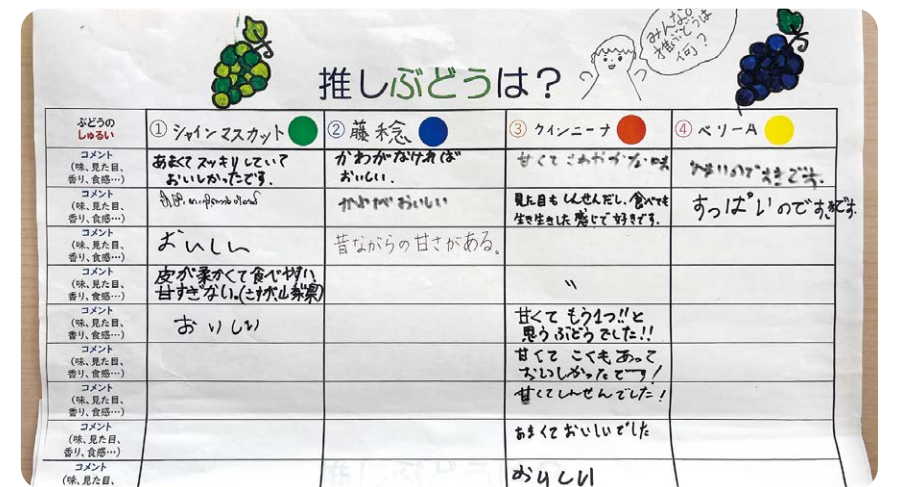
生活が生まれます」と矢崎さん。生活と結び付いた体験を言葉にしたり、思ったことを言葉にする機会を大切にしている。

話したいと思える相手がいること

学習支援室は、孤独に陥りがちな外国の子どもたちにとって、貴重な交流の場にもなっている。話を聞かせてくれたミャンマールーツの二人もここで知り合い、友達になった。矢崎さんは、気を楽にしていられる場所を提供したいと願う。「学校で話し相手がいなかったり、家族が共働きで夜一人になってしまったり、居場所のない子も多いんです。この場所の存在意義は、言葉を学ぶことを超えて、学校でも家でもない三つ目の居場所であることです」。家庭

では共有しにくい学校の悩みも、ボランティアにはわかってもらえる。「話したいと思う相手がいることは、日本語学習に大きく影響すると思います。些細なことでも、すごい、がんばってるね、と褒めてくれる、よかったね、と話を聞いてくれる人。認められると、その状態を保ちたい、そうあり続けたいと思える。それが、がんばりたいという気持ちにつながります」。

言葉の力を育むだけでなく、生活や心に寄り添い、一人一人の夢ややりたいことを実現する手助けをする。外国ルーツの子どもたちを長年にわたって支援してきたさぼうと21の取り組みには、子どもたちと向き合ううえで知っておきたい、大切な視点が詰まっていた。



ボランティアが持ってきてくれたぶどうを、みんなで食べ比べ。
感想を1枚の紙に書き込んで共有する。



気象予報士としての知識や経験をもとに、天気や自然現象を表す言葉にうつし出される人々の感性や文化、ものの見方・考え方などを紹介していただきます。

第2回

春の言葉に心が温まる瞬間

長年花粉症の私にとって、春は手放して喜べる季節ではなくなっていました。ただ、鼻をすすりながらも天気予報を伝えるときに心が不思議と軽くなることがあります。それは、春を表す「天気という言葉」を使うとき。とても美しく、慈愛に満ちているのです。

二十四節気でいえば3月上旬の「啓蟄^{けいちつ}」。土の中で冬眠していた虫たちが、春の暖かさに誘われてはい出てくる頃を意味します。おもしろいのは、春の晴れた暖かな日に街へ繰り出すと、駅前や公園には、冬の間には見かけなかったほど多くの人があふれかえっていることです。分厚いコートを脱ぎ捨て、うきうきと街を歩く人々の姿を見ると、「私を含めて、人間もまた虫の仲間であり、自然の一部なのだ」ということを強く実感します。啓蟄という言葉には、冬を越え、春を待ち望む生き物たちの本能的な喜びが詰まっている



写真：長谷部 愛

と感じるのです。

4月に入り、万物が清らかに光り輝く「清明^{せいめい}」を迎えると、空気が変わります。それを象徴するのが、二十四節気よりさらに細かい七十二候の一つ「虹始見(にじはじめてあらわる)」。

冬の乾燥した風が去り、空気が湿り気を帯び始め、雨上がりの柔らかな光の中に、今年初めての虹が架かっていく。春という季節が「光」と「水」の調和によってできていることを感じさせてくれます。

また、春の言葉には「曖昧さ」を始める日本独特の感性が特に光っています。「麗^{うら}らか」や「春霞^{はるがすみ}」、「朧^{おぼろづき}月」、そして桜の時季の曇天を指す「花曇^{はなぐも}り」。輪郭がぼんやりと霞んだ風景に情緒を感じるのは、白黒ははっきりしたものだけではなく、曖昧さに美しさを感じる日本ならではの美学でしょう。私は、特に「花曇り」という言葉が好きで、よく口にします。真っ青な空に映える花々ももちろん美しいのですが、薄曇りの柔らかな光の下では、桜の花そのものがもつ繊細な淡い薄紅色が、ふわっと浮かび上がります。まぶし

ぎない空が、主役である花の色を最も引き立ててくれるのです。どんよりとした曇り空さえも、花と合わせることで「一興」として受け入れる言葉の豊かさがあります。

近年、春の訪れは早まり、気づけば初夏のような暑さに追い越されてしまうことも増えています。季節の境界線が曖昧になる中で、こうした豊かな言葉が与えてくれる「季節の情景」を、丁寧にすくい上げ、めでていきたい気持ちが強くなりました。言葉を通じて季節の微細な変化に耳を澄ませる。そんな心の余裕だけは、失わずにいたい。移ろいゆく空の表情に美しい名前をつけ、めでてきた文化をしみじみと感じ、これからも長く続くことを願う近頃の春です。

長谷部 愛 HASEBE Ai

気象予報士、東京造形大学非常勤講師。1981年神奈川県生まれ。信州大学教育学部卒業。テレビ・ラジオ局員として、番組制作・キャスター・リポーターを経験後、2012年に気象予報士資格を取得。翌年からTBSラジオ、Yahoo!天気・災害動画などに出演。2018年から東京造形大学で教鞭を執る。著書に、『天気とよくとく名画』(中央公論新社)など。

日本語と英語の行間で考える

幼少期より日本語と英語を使い分けながら、それぞれの表現やコミュニケーションについて考えてきたニキさんの視点で、これらの魅力や ままならなさをポップにライトにつづります。

第2回

あなたにとって「卵サンド」とは？

去年、アメリカの某コンビニ大手が、日本のフランチャイズの成功例を参考にアメリカ国内の店舗を増設すると発表した。発表されたいくつもの新商品で最も注目を集めたのがJapanese-Style Egg Salad Sandwich、「卵サンド」だ。「枕のように柔らかい食パンとマヨネーズであえたまろやかな口触り」が各メディアで絶賛され、もはや伝説のサンドイッチとなりつつある。すでに海外の一部ではtamago sandoの名称が定着しているようだ。

卵サンドで思い出すのが、何年も前に現場通訳(兼雑用係)として関わった、アメリカ制作のTV番組の仕事。日本各地を紹介する旅番組で、早朝から夜まで移動と撮影が続く苛烈なスケジュールの中、ホテルの朝食にありつけない日もあった。ある夜、次の日の朝までにcoffee and egg sandwichesを人数分調達してほしいと言われた私は、深夜のスーパーやコンビニを片っ端から回って大量の卵サンドとコーヒー飲料を買いあさった。しかし、袋をのぞき込んだアメリカ人現場スタッフに「これじゃない……」と肩を落とされてビックリ。彼女が想像していたのは、目玉焼きかオムレツのように焼いた卵と溶けたチーズを挟んでグリルした熱々のサンドイッチだったのだ。「こんな片田舎の町でそんなしゃれたモノ買えるわけないでしょ！日本でegg sandwichと言ったら卵サラダを挟んだものに決まってるの！」と逆ギレしたい気持ちをこらえて、なんとか次の日の朝を乗り越えた。言葉の壁とはまた違う、文化の壁。

その数年後、札幌での国際的スキー大会の会場下見

のため、カナダ人の役員と車で移動中に「あの山が見えてきたらもう会場は近いですよ」と伝えると、役員はクスクス笑いながら“Those aren't mountains. Those are hills.”(あれは山じゃない、丘だよ)と答えた。ムッ失礼な、と思いながらやりすごしたが、その翌年、カナダのプリンスジョージという町の世界大会で日本代表チームに帯同した私は、彼の言葉の真意をようやく理解した。巨人が上空から覆いかぶさってくるような険しい山の麓で、これまでの人生でこれほど大きなものを視界に入れたことがないというスケールの巨大さに、畏怖の念にかられるほど、本当の「山」の威力を感じた体験だった。

誤解のないように言っておくが、札幌のスキー場の山だって正真正銘の「山」だし、卵サラダをパンで挟もうが、オムレツをパンで挟もうが、あなたがそれを「卵サンド」とよぶなら立派な卵サンドだ。でも、その言葉の裏に秘められたイメージや期待を全ての人が最初から共有できている保証はどこにもない。わかっているはず、通じているはず、という期待は予期せぬ形で裏切られることもある。

「あなたにとって卵サンドとは？」なんていちいち確認するような面倒くさいことはしたくないけれど、あなたが使う言葉の意味と、私が使う言葉の意味は時に似て非なる場合もあることを常に心の片隅に置いておきたい。

キニマンズ塚本ニキ Nikki TSUKAMOTO KININMONTH

通訳・翻訳家・ラジオパーソナリティ。1985年東京都生まれ。9歳から23歳までニュージーランドで暮らし、オークランド大学で社会学・ジェンダー学・映像学などを学ぶ。日本に帰国後、フリーの通訳・翻訳者として国内外の社会課題の啓発や対話の現場に携わる。TBSラジオ「荻上チキ・Session」やYouTubeチャンネル「ポリタスTV」などのレギュラー出演、雑誌コラムを通して発信中。著書に『世界をちょっとよくするために知っておきたい英語100』(Gakken)がある。



イラスト：水沢石鯨

第1回

無難な正解

小津夜景

俳人

この言葉がわたしをつくった、と胸を張って言えるようなものはどうにも見当たらない。人生の分岐点で師匠が一句授けてくれた、とか、座右の銘を額に入れている、とかいったすごい話とは縁がないし、通りすがりに投げかけられた言葉はそのまま通りすがりで終わる。理由は単純で管理ができないからだ。言葉を保管する棚を最初から用意していない。

実のところ、「自分をつくった言葉」を本気で掘り起こそうとするとろくなことになる。そういうときに浮かんでくるのは、引用するには気が引ける言葉や言い直したくない言葉、できることなら存在ごと忘れてしまいたい言葉ばかりだ。そんな言葉に引っ張られて仕上がりそうになる自分をどうにか別方向へ逃がすために、子どものころのわたしはピアノを弾いたり絵を描いたりしていた。音や色のあいだに身を置いているときは、言葉がこちらに伸ばしてくる手が少しだけ弱まる気がしたからだ。にもかかわらず、巡り巡っていちばん強く執着することになったのが言葉だったというのは、人生の設計としてはなかなか手痛い部類の誤算である。

小学生のころ、日曜の午前によく父がFMラジオをエアチェックしていて、番組を録ったカセットテープが家にあった。ある日、ひとりでそれを再生してみた。井上陽水の特集だった。

歌詞が、とにかく変だった。言葉の並び方が変で、その変さを隠す気がまったくない。わからなさが堂々としていて、しかもどこか色っぽい。狂気にちゃんと笑いがある、という感じだ。聴いているうちに、これはもっと聴かなきゃいけないやつだ、という妙な責任感が湧いてきた。「お年玉をおろして井上陽水のレコードを買う！」

わたしは母に宣言した。宣言というより通告に近かったと思う。わたしの熱量に母は一瞬たじろぎ、「クリスマスまで待ったら？ そしたら買ってあげる」と制止にかかったが、待てない。ますます欲しい。自分のお金で買うんだからいいでしょうとごね、やや引き気味の母とレコード屋へ行くことになった。

店に入ると、アルバムが何枚も並んでいて急にあわてた。どれを選べばいいのかわからない。すると母が一枚を手にとって言った。「最初はこれにしたら？ 日本のレコードで、はじめて百万枚売れたのよ」。売上実績から入るプレゼンに、子どもながら「それ、音楽の買い方として正解なのか？」と引っかかりを覚えつつ、結局それを買った。『氷の世界』だった。

家で聴いてみると、湿り気が苦手なわたしには、「うわっ」と思う部分も正直あった。が、その中に混ざっているナンセンスさにはがっかりとハマった。何度も針を落とし、気づいたときには感染していた。どれくらいの深度だったかということ、小学校の卒業文集の「尊敬する人」の欄に「井上陽水」と書いたくらいだ。

できあがった文集を見ると、ほかの子どもたちは全員「両親」と書いていた。「尊敬する人」という欄に、そんな無難な正解が用意されているとは知らなかった。

小津夜景

OZU Yakei

1973年北海道生まれ。2000年よりフランス在住。句集に『フラワーズ・カンフー』(ふらんす堂)、『花と夜盗』(書肆侃侃房)。エッセイ集に『カモメの日の読書』(東京四季出版)、『いつかたこぶねになる日』(新潮社)、『ロゴスと巻貝』(アノニマススタジオ)。その他、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者須藤岳史との往復書簡『なしのたわむれ 古典と古楽をめぐる手紙』(素粒社)。現在、「すばる」(集英社)で「空耳放浪記」連載中。



イラスト：日下 明

「言葉の時代」は終わらない。

心を伝える。感性が豊かに響く。理性をしっかり構築する。

AIの主人となる。国境を、人種を、文化を、軽々と超えていく。

すべては、言葉が成し遂げる。「生きる」のふもとに言葉がある。

私たちは、光村。言葉の力を紡ぐ者。

力ある言葉を、あらゆる面から追究し、届け、

それがまた次の世代へと受け継がれるようにと願って、

終わることのない言葉の時代を切り拓いていく。

光村図書創立
77周年

教科書の ひみつ展

言葉と歩く、
光村の
これまでと
これから

2026年8月6日(木)～8月11日(火)
会場：日本橋三越本店 新館1F
料金：入場無料
詳しくはこちらをご覧ください



光村図書ウェブサイト

光村図書

検索



小・中・高等学校
教科書訂正のお知らせ



光村図書
LINE公式アカウント
友だち募集中!



とことば
tokotoba

2号

2026年4月22日発行

発行者 ● 吉田直樹

発行所 ● 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話 ● 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp

デザイン ● 深山貴世 (ZONOCO)

イラスト ● 金井真紀 (表紙・見返し・p2-4)

印刷所 ● 協和オフセット印刷株式会社

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に
則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

教育情報誌に関するお問い合わせ先
住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp
ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp

